

# なぜ屋根・壁に 石州瓦か

建築家 内藤 廣 氏

石州瓦で覆われた劇場・美術館  
七変化する「島根県芸術文化センター」

平成17年10月8日、島根県益田市にオープンした「島根県芸術文化センター」(愛称・グラントワ)が大きな話題を集めている。屋根のほか、壁の全面を石州瓦(釉薬の来待色)が覆う。屋根・壁瓦に当たる光の角度で、建物の外観は、赤茶色、あるいは青みがかった緑色など七変化し、朝、昼、晩と時間帯によっても色合いが違ってくる。

設計は、コンペで選定された内藤廣建築設計事務所。内藤廣氏に「なぜ屋根・壁に石州瓦か」を聞いてみた。

(聞き手=本誌・吉田)



## 1300℃焼成の瓦は300年保つ 施工はオープンジョイントで

「瓦」というものを  
性能として捉え直した

——屋根のほか、壁の全面に地場産である石州瓦せきしゅうを使いました。

内藤 基本的な考えとして、近代建築の材料がとても弱くなってきているんです。高度成長期のつくって30年という材料では、出来上がったときが一番良くて、あとはどんどん良くない方向で古びていく。近代建築が家電製品にどんどん近くなってきている。コンペでは、そういう考えとは全然逆のものを提案したわ

けです。

ずいぶん迷ったんですが、益田市のある石見いわみ地方には、原風景を彩る石州瓦というとても素晴らしい地域素材がある。そこの主要な産業でもあるし、性能的に良くて、一般の方にも馴染みが深いとなれば、屋根に使わない手はないじゃないかと。

ただし、僕がやろうとしたのは、石州瓦というものを性能材料として見直すということです。単に郷愁で使うとか、みんなが好きだからとか、それではやはり表面的な話になってしまう。

瓦のディテールというのは400年くらい前の職人さんや当時の建築家が一所懸命考えてつくったわけですね。瓦と瓦のジョイントについても、木造では完成されたものがある。その「瓦」というものをもう一度性能としてみてみようかと——。あくまでもエンジニアリングから入っているんです。

今回はコンクリート造ですから、屋根にどうやって固定するか？ これに関しては、出雲の建築家・江角彰宣さんたちと知恵を出し合っていました。

もう一つは、瓦を壁全面に使ったということですね。もちろん宮本忠長さんや磯崎新さんが部分的に使った事例はありますが、それとは違う話で、壁瓦を性能的に考えてやりました。これが一番大変でしたね。

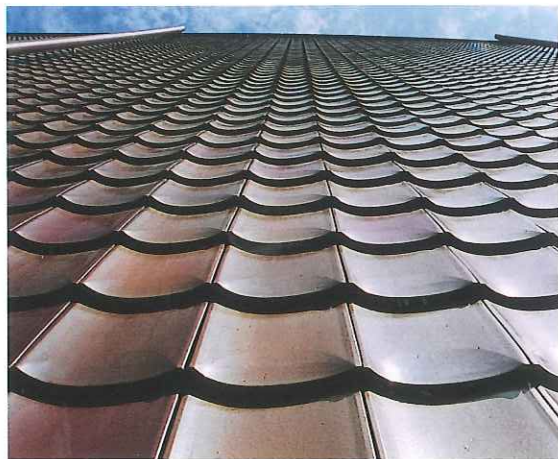
瓦は僕らの言葉で言うと「オープンジョイント」。今の外装材の仕上げは、コーキングを使うなど、部分的にケミカルに頼っているから紫外線とか経年変化に弱い。

しかし瓦みたいに熱の入ったものは経年変化しませんから、その間を埋めるのにケミカルを使うというのはバカな話です。ただしオープンジョイントを壁でやるにはどうするかという応用問題を解かなきゃいけないわけです。

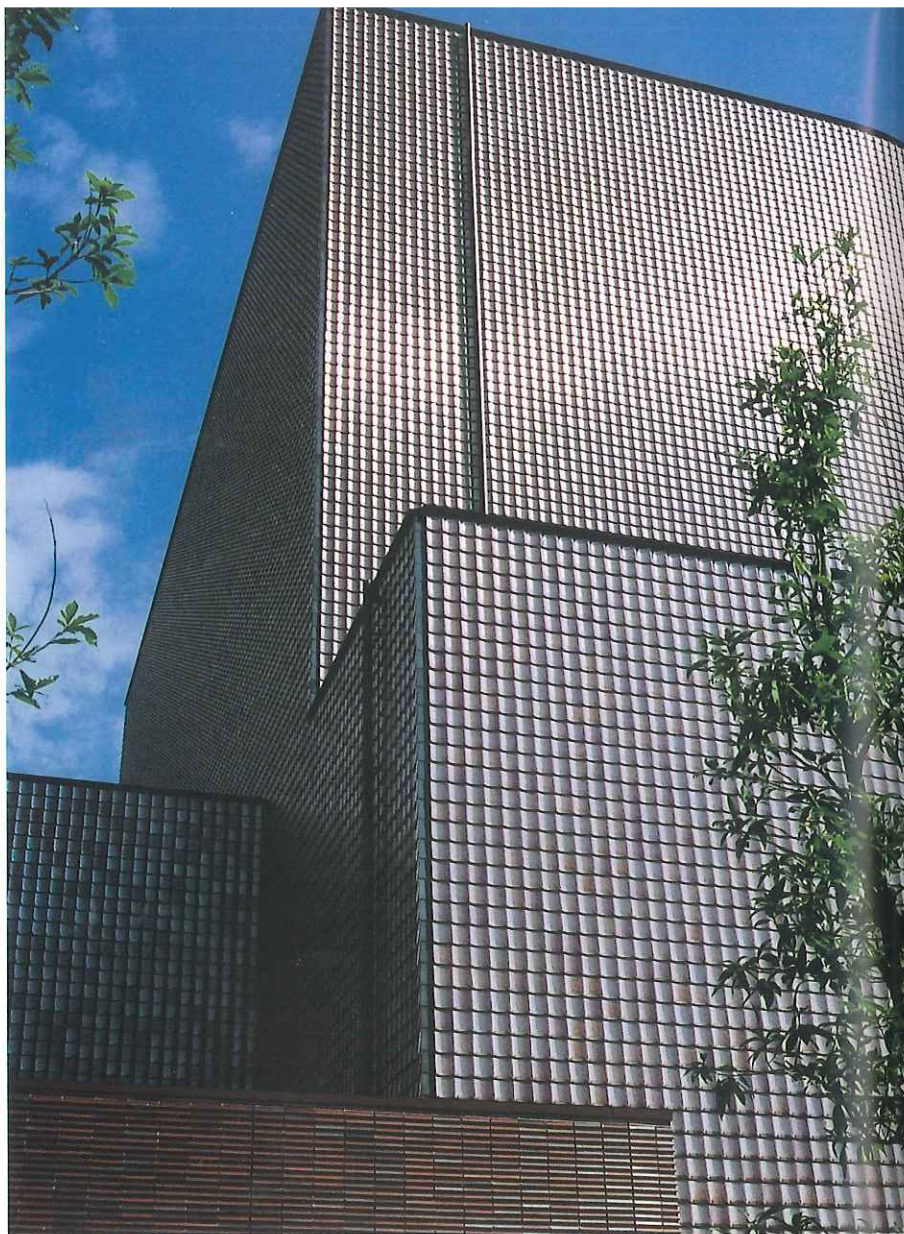
## 登り窯で焼いた赤瓦がバラついた「その感じ」

——屋根・壁瓦の色は、石州瓦の来待色を6種混ぜたということですが、各面によって、また朝昼晩、季節によっても外観が七変化する。これも魅力ですね。

内藤 本当に予想外だったんですよ。建築というのは、素材と真剣に向き合うと、僕らが予想もしなかったような面白い特徴や美しさが現れたりする。長いプロセスの中でね。



壁瓦は型も施工法も新たに考案された



七変化する外壁

でも建築家、あるいはつくる人が、それを美しいと感じる感性がなければ生かせない。

今回は、それがたまたま石州瓦の表面だったということ。「これはきれいだ。これを大切にしよう」と

みんなが思って、あとは建築家が、その素材を主役にして、ほかの材料はできるだけ邪魔をしないように、脇に回るように、全体の設計を調整していけばいいと思うんですよ。

屋根・壁瓦の色はイメージとして

## 「島根県芸術文化センター」と益田市

益田市は、島根県西部の石見地方にあって県西端に位置し、柿本人麻呂や雪舟のゆかりの地としても知られる。人口は約5万人。

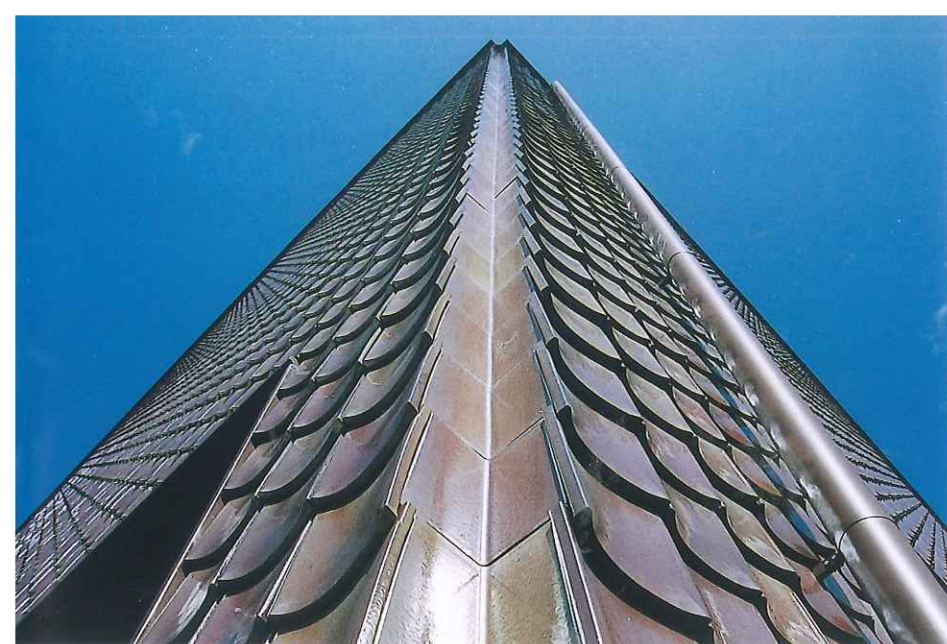
その地域住民が、これからの町おこし・文化再生の拠点として期待しているのが県芸術文化センターである。平成17年10月8日に開館。

芸文センターは、県立石見美術館と県立いわみ芸術劇場を併設し、愛称はフランス語で“大きい屋根”を

意味する「グラントワ」。

外観の特徴は、屋根のほかに壁にも地場産瓦である石州瓦を全面に採用したこと。周囲の石州赤瓦の町並みにすんなりと溶け込んでいる。

また「高い耐久性を確保するため、現場打ち鉄筋コンクリートを積極的に採用し、内部空間ではスギ板型を用いた打ちっ放し仕上げを基調としたこと」。



異彩を放つ壁瓦

は、益田の一昔前の赤瓦屋根。登り窯で焼いた赤瓦のバラつき方とか色味といった「その感じ」で選んだわけです。江角さんたちにも相談し、最終的には知事にも見てもらいました。

ただし、結果は市民の側にある。皆さんが本当に受け入れてくれるかどうかです。今のところ、ほとんどの市民の方が、ホールができた、美術館ができたという以上に、建物全体の「あの感じ」というのを喜んで下さっているということは聞いてます。

## 400年前の築城技術はミサイルに匹敵する先端技術

——壁瓦は、新しく金型から起こし、その施工でも完全乾式工法を新たに考案しました。

前からある地域の材料を使い、そ

れを新しい工法でやるということは、意識的にしていることなんですか。

内藤 僕には、あらゆる在来の地域の素材というのは、屋根材から左官材料、木軸の工法まで、「かつての先端技術だった」という気持ちがあるんです。

つまり400年前の築城技術は、今の戦車やミサイルに匹敵する先端技術だったわけです。命に関わりますから、必死にその時の叡智の一番高いものを使う。築城技術の時代が終わっても、職人たちが庶民の住まいとか町をつくる時に、その技術のエッセンスは残っているんです。僕らはその人たちの努力とか知恵に、400年間甘えてきたと言えなくもない。その果てに、在来工法だとか伝統的な材料だとか言っ、自分たちは思考停止しているわけでしょ？やはりそれではいけない。

その中のいいものを使い、現代の僕らが持っているコンピューターであるとか、先端技術を並列に置いてみて、どういうふう組み合わせると一番いい結果が得られるかというのが僕流のやり方です。

古いものと先端的な現在が出合うことによって新しい価値が生まれる。そこにいかないと面白くない。

## 400年の歴史をもつ石州瓦

粘土瓦の三大産地のひとつ、島根県の地場産業である「石州瓦」の起り方は、江戸初期の浜田築城（1619年）とされ、窯元は県西部の石見地方に散在していたため、「石見瓦」とも呼ばれている。

かつての石州瓦は別名「赤瓦（来待瓦）」。来待石（八束郡宍道町）の粉の生釉を釉薬の代わりに用いて登り窯で焼いていた。

石州瓦の特色は、塩害・凍害・衝撃に強く、耐久性があることで、その秘密は、1250℃の高温焼成に耐えられる原土にある。石州瓦は山陰のほか、かつて北前船によって北陸から北海道にも運ばれ、使われていた。

現在、瓦製造メーカーは大田市、江津市、浜田市、益田市など石見地方に19社あり、石州瓦工業組合（江津市）を組織する。瓦の年生産は約2億枚、生産額は約200億円。

——瓦の壁への新しい使い方など、確かに瓦業界は提案力が不足しています。

内藤 それはサプライ側の努力の問題だと思う。建物の事例があるから建築家に引張られて開発するということではなくて、新しい地域の材料として、5年、10年先駆けて研究開発していくのが本筋でしょう。

瓦に限らず、木材でもそうですが、産地はできるだけ決まったモジュールものが、たくさん売ればいいと思っている。その先で起きている世の中の変化や欲していることに対しては無関心。

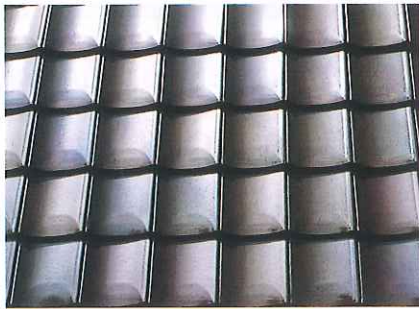
そうではなくて、情報を収集し感性を働かせ、むしろニーズをつくり出していくサプライ側の意気込みが本来必要でしょう。

——瓦の性能で、「100年、もしかしたら300年は保つよ」という言い方をされていますね。

内藤 僕らが手にしている素材を100年単位で見たとき、みすばらしくならない材料というのは意外と少ない。その辺が、近代建築がすぐに疲れて見えてしまう要因だと思うんです。



劇場の内部 写真提供・島根県芸術文化センター



同じ赤系の壁面とは思えない壁瓦



瓦で覆われた芸文センター。中庭にその求心力を持たせた 写真提供・高根県芸術文化センター

そう考えたときに、熱の入っている建築材料は変化しないわけです。最高度に熱が入っているのは石ですが、ジョイントを自由につくれないという問題がある。

ところが今、エンジニアリング的に1300℃の高温で焼いた石州瓦を普通に手にできる。また100年前の石州瓦が、それほど変化なしで我々の手元にあるということは、恐らくもう100年くらいは大丈夫なわけです。あとは使い方を間違えなければ、300年くらいは大丈夫と思っています。

この間、林昌二さんが面白いことを言っていました。「地球が300年保ちますかね」と(笑)。

## 石見銀山の世界遺産は屋根瓦の耐久性にある

——今回の芸文センターは、町おこしや石州瓦の振興にもプラスになりそうです。

内藤 僕としては、益田という町や石見地域の人たちのある種の心の支え、誇りとなるものをつくりたかったわけです。それが一生懸命支援して下さった知事への一つの答えの

出し方だと僕は思っています。文化施設というのはそういうものだから。

数年先に石見銀山遺跡\*が世界遺産に登録される見込みですが、「遺産としてあるのは瓦屋根がしっかりしていたからだ」と言われています。その屋根に守られた構造躯体だとか軸組だとかは補修すれば何とかなる。

僕は、それが石見銀山が世界遺産に登録される大きな要因だと思うんですよ。

## 瓦屋さんは住民を味方に付けられるかどうか

——石州瓦産地では、最大市場で

ある関東に売り込みたいと考えています。

内藤 それは、ちょっと違う気がしますね。それでは三州瓦(愛知)と取り合いになってしまう。吸湿性能をもつ三州瓦は、太平洋岸の気候に合っているわけです。

それに対して石州瓦は、積雪寒冷地の日本海側の気候に合っているんですよ。狙うとしたら「市場が大きい関東」ではなくて、昔、北前船ルートで版図を拡げた北陸とか北海道ではないでしょうか。

大きな話でいえば、日本はこれから再構築されていく。地方分権推進法で市町村合併の次は道州制という話も出ている。また景観法が施行さ

### ないとう ひろし

1950/神奈川県横浜生まれ  
1974/早稲田大学理工学部建築学科卒業後、同大学院にて吉阪隆正に師事  
1976/修士課程修了  
1976-/フェルナンド・イゲラス建築設計事務所勤務(マドリッド/スペイン)  
1979-/菊竹清訓建築設計事務所勤務  
1981/内藤廣建築設計事務所設立  
2001/東京大学大学院工学系研究科社会基盤学助教授を経て、2003年より同教授

### 主な作品

- 「海の博物館」=芸術選奨文部大臣新人賞、日本建築学会賞、第18回吉田五十八賞(1993)
- 「安曇野ちひろ美術館」
- 「牧野富太郎記念館」=第13回村野藤吾賞、IAA国際トリエンナーレ グランプリ、第42回毎日芸術賞(2000)/第42回BCS賞(2001)
- 「倫理研究所 藤高原研修所」
- 「ちひろ美術館・東京」=第45回BCS賞(2004)



芸文センターの全景

「島根県芸術文化センター」  
 所在地／島根県益田市有明町 5 番15号  
 0856・31・1860 (代表)  
 用途／美術館、劇場  
 設計／内藤廣建築設計事務所  
 東京都千代田区九段南2-2-8  
 松岡九段ビル301  
 03・3262・9636  
 施工／大成建設・大畑建設・日興建設の  
 特別共同企業体  
 敷地面積／約3.7ha  
 建築面積／1万4,000㎡  
 延床面積／1万9,000㎡  
 階数／地上2階+地下1階

れ、それぞれの町や地域のアイデンティティの再構築が迫られている。  
 そういう意味では、日本海側というのは、開発が遅れた分だけ古い町や自然が残っていて、いわば宝庫なわけですね。そこに、「石州の赤瓦は風土的にも合っているし、耐久性も高いんだ」ということを提案していくべきだと思いますね。  
 そのとき、瓦メーカーと在来木造の工務店が手を組んで「景観法では、瓦屋根と在来工法が大事ですよ」というキャンペーンをやる。ところが、僕が長年、町づくりに関わっている中で、木材組合の人や建築士は出てきますが、瓦業界の人は一人も出てきたことがない。  
 それと重要なのは、一般の人たちとの信頼関係があって初めて、中間にいる建築家が動いたり、建設会社が動いたりするという。若い瓦

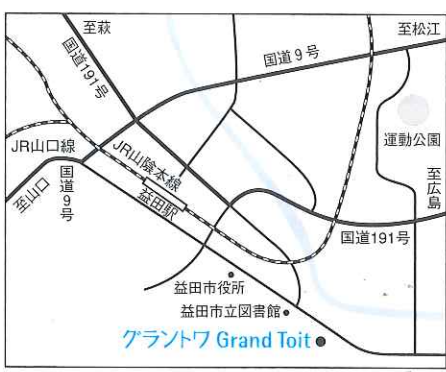
屋さんたちが中心となって、「皆さんの生活を守る屋根をつくっているのは私たちです」という信頼関係を結べるかどうかですね。  
 さっき「町の誇り」と言いましたが、「おれのつくった瓦が町の人たちから愛されて、町の風景をつくっているんだ」という誇りを親父さんが持っていれば、次の世代は確実に育ちますよ。金がなくても。

### 100年後も同じようなバリューを持ちうるか

——手がけているプロジェクトはいずれも長いと聞いています。  
 内藤 建築で4年5年という「長い」と言われますが、土木系では一番短くて宮崎でやっている8年。旭川では10年、倉敷のプロジェ

クトは10年以上です。  
 大事なことは、10年も経つと時代も変わるということ。10年後に出来上がったときに、今提案したことがちゃんとしたスピリットを持っているかどうか。とくに公共建物の場合、100年後も同じようなバリューを持ち続けているかどうかです。  
 ——ありがとうございます。

\*「石見銀山遺跡」 島根県のほぼ中央に位置する大田市にある。中世から近代まで400年の歴史をもつ世界有数の銀鉱山遺跡で、当時の生産現場から町並みまで、文化的景観が保存されている。  
 世界遺産登録の候補となっている。



資料提供・島根県芸術文化センター